「カウンセリング必要」

四川大地震 AMDAが活動報告

余震頻発、肉親や友の死…

不安消えない被災者

中国・四川大地震で緊急医療チームを派遣した国際医療援助団体「AMDA」（岡山市楢津）が25日記者会見し、「現地の病院には肉親を亡くした人が多く、外傷と同時に精神面での治療も行った」など、現地での活動を報告した。

会見では、現地で調整員を務めたニティアン・ビーラバグさん、岡山大学から派遣された汪達紘医師らが出席。冒頭で菅波茂代表が「中国側から求められた条件は、中国語の語学力と中国の医師免許。AMDA台湾を中心にしたルートを生かし、信頼関係を築けた」と活動を振り返った。

AMDAは先月14日から今月19日にかけて計23人の医師、看護師らを派遣。四川省・成都で外科手術を含む治療を行ったほか、山岳地帯にある村に仮設診療所として3張りのテントを設置して負傷者10人を診察した。さらに、避難者が多かった徳陽市の体育館では1日あたり延べ50～400人の治療にあたった。

また、今回の地震では負傷者の診療の一方で、精神的な不安を訴える被災者も目立った。現地の病院で治療にあたった汪医師は「頻発する余震への恐怖を感じる患者や、小学校が倒壊し、がれきの下にいた子供も入院していた。同級生も近くで亡くなっており カウンセリングが必要だった」と話した。菅波代表は「当初予測していなかったが、現地のニーズがあった」といい、最終的に精神科医によるカウンセリングと心理カウンセラーの養成研修も実施した。

【石戸諭】

精神的な不安を訴える被災者にカウンセリングするAMDAの医師＝AMDA提供